冷えたホットミルクティー

真辺よっぴー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冷えたホットミルクティー

【Ｎコード】
Ｎ４９６７Ｉ

【作者名】
真辺よっぴー

【あらすじ】
「あなたの目、濁ってるわ。まるで冷えたホットミルクティーみたい」

吉見久史は海業工業大学の工学部機械航空学科に在籍する３年生であった。１年前、父親を急に亡くした後は、自分の価値観全てが崩れ去り、何もかもがそれまでと違って見える世界へと変化してしまった。

――どうして？　何故？　それは自分でもわからなかった。

そんな時、アルバイト先で一人の妙な女性と出会う。彼女は何故か、決まってホットミルクティーだけを注文し、そして何故か、何も手をつけずに帰っていくのだ。最初は全然気にも留めていなかった彼女のことが、しだいに気になり始めてゆくが……。

自分の見えている、見ようとしている世界とは何か？

自分を問う物語。

「ホットミルクティー、お一つですね。ありがとうございます」
僕はたどたどしい笑顔を貼り付かせながら、接客口調の少し高いトーンで言った。左手でレジの液晶表示のアイコンに触れると、２６２円という文字が浮かび上がった。
カウンター越しに若い背の低い女性の客が一人、少しびくびくしたぎこちない様子で小さな革の財布の中身を覗いていた。見た目は大学生で、年齢は２０歳になるか、ならないかというくらいであることは、初対面の人でも恐らく簡単に予想できるだろう。しかし、もしかしたらまだ、高校生にも間違えられるかもしれない。そんな少女のようなあけどなさを残したその顔つきを隠すように、艶のある美しい真っ直ぐな黒髪が肩の上くらいまで伸びている。今時にしては珍しい綺麗な髪だ、と思う。服装も高校生が着るようなそれではなく、黒を基調とした落ち着いた色で統一されていた。それらが大人びた印象を前面に押し出しているのかもしれない。ふわり、とコンディショナーの香りだろうか、彼女が俯いた顔を上げると同時に、柔らかな優しい空気が辺りに漂った。
表示金額ちょうどの小銭を音も立てずにカウンターの上に置くと、彼女はまた小さな顔を俯かせた。心なしか、頬が火照ったように見えるのは、僕の気のせいではないだろう。もともと小さくて幼く見える顔が、ますます小さくなった。
僕はカウンターに置かれた小銭を手に取り、清算を終え、彼女にレシートを手渡した。小さな色白の手でそれを受け取った彼女は、律儀に財布の中にしまった。それから、まるで忘れてきた教科書を好きな男子生徒から借りた時のように、照れくさそうにそそくさと空いている席へと向かっていく。いつもの、入口に近い窓際の禁煙席だ。
ざっと見渡して、座席が３０席以上はあるこの店は、ここら辺で

は割と大きいファーストフード店だが、今日は土曜日の夜だというのに席はぽつぽつとまばらだった。これは珍しいことであった。だから、いつも同じ席に座る小さな彼女の存在が、更に浮いて見えてしまう。

いつも同じ席に座る彼女。いつも同じホットミルクティーを注文する彼女。変わるのは服装だけ。そんな客を記憶の中に留めることは難しくなかった。だが、僕にとっては、それは彼女が一人のただの珍しい客として、頭の中に機械的にインプットしているだけのことにすぎない。

「吉見、ホットミルクティーでいいのか？」

不意に声をかけられたので、思わず僕はびくりと肩を上げてしまった。振り向くと、寺崎昭先輩がティーポットを持ちながら、紅茶のティーバッグが入った透明な容器を開けていた。

「はい。いつもの――」

と、そこまで言って僕は口をつぐむが、既にもう遅かった。

寺崎先輩はにやりと笑うと、ポットの中にティーバッグを入れ、お湯を注いだ。

先輩は僕の一つ上の大学四年生であり、このアルバイト先では仕事のやり方や接客方法などを教育してくれた人だった。建築の学科に在籍しており、成績はトップクラスと聞いている。しかし、成績がトップクラスの人間が、必ずしも性格までもが素晴らしいとは限らない。

にやにやとした笑いを貼り付かせながらホットミルクティーを作っている先輩を尻目に、僕はグラスに氷を入れ、お冷を作る。水と氷の入ったグラスをトレイの上に載せ、先輩の元へと持っていくと、香ばしい香りとともに、熱々の湯気が立ったホットティーの入ったポットが置かれた。カップとスプーンをソーサーの上に置き、ミルクと砂糖を最後に添えた。それらを窓際の彼女の元へと持っていく僕に先輩は、

「やっぱりいつもこの店にやって来ると、吉見も気になるよなぁ。

動揺してポットをひっくりかえすなよ」
　と茶化してきた。僕は無視してホットミルクティーがセットされたトレイを持っていく。スプーンとカップが擦れて、耳障りな音がする。
　席に着いている彼女は、そんな僕と先輩のやり取りを知る由もなく、抱えていた小さなトートバックの中身を覗き込んでいた。割とカジュアルなタイプのもので、大学生が持つ分には十分なものだ。性格は大人しそうに見えるが、やはり、意外と身なりはしっかりとしているみたいである。落ち着いて見えるからこそ、身なりがしっかりしているのかもしれなかった。
　彼女は僕が近付いて来るのに気づくと、何故か慌てた様子でバックを閉じ、脇へと追いやった。何をそんなに焦る必要があるのかと内心思いながらも、顔には出さずに僕は静かにトレイをテーブルの上に置く。
「ごゆっくりお召し上がりくださいませ」
　営業用の、感情など込める気のない一文のセリフを、口から滑らせるように転がし出しながら、言い終わらぬうちに僕はその場から素早く離れた。彼女が何か遠慮がちに呟く言葉が耳にかろうじて届いたが、さっさと戻りたかったので立ち止まることはしなかった。どうでもいいことだ。そう自分に言い聞かせた。
　セールスエリア――僕ら店員が働く場所に戻ると、案の定、寺崎先輩の目が憎らしいくらいにへの字に吊り上がっていた。
　午後１０時過ぎ、今までの暇な時間が嘘のように、客がお互いを押しのけるようにしてどっと押し寄せてきた。僕と寺崎先輩の２人は、その客の持ち帰りや召し上がりの対応やら後片付けやらの連続に追われ、息つく間もなかった。だが、僕にとって息つく間もないこの時間は、至福の時間だった。理由は、何も考えなくても良いからだ。ただ、マニュアルの通りに、自分が作った飾りの笑顔を、薄っぺらく貼りつかせながら動いていれば良い。あれこれと無駄な事を考えれば考えるほど、人間は弱くなると思う。そんな弱くなった

自分など、もううんざりだった。
　ようやく押し寄せる客の波が穏やかになり、一段落した頃にはもう午後１１時を回っていた。最後の持ち帰りの客を対応し、ふと何気なく入り口近くの席に目をやると、彼女の姿は既に無かった。
　いつの間に帰ったのだろう、とぼんやりと考えていると、後ろの方で何かが乱暴に置かれる音がした。肩越しに後ろを見ると、緑色の布巾が台の上に置いてあった。
「後片付け。ぼんやりするな。閉店時間が迫ってるぞ」
　寺崎先輩は冷たい言葉を置き去りにして、裏の方へと引っ込んでいく。洗い物か、と思いながら、僕は黙って緑色の布巾を持ち、後片付けに向かった。
　深夜の店内で召し上がりの客が帰った後のテーブルは、まるで幼い子供が食べ散らかしたように乱雑だった。飲みかけのグラスや食べかけの器、無造作に散らかされた紙屑、粉砂糖のこぼれかすなどが、テーブルのあちこちに点在していた。それらを一つにまとめ、布巾を使ってテーブルを綺麗にした後、食器やグラスを裏の洗い場へと持って行く。寺崎先輩は、「そこに置いといて」と言いながら、後ろの銀色の食器棚を顎で指した。
　残るのは、店の入り口近くの彼女が座っていた席だけだった。行ってみると、他の席の乱雑さとは対照的に、そこだけはきちんと整然としていた。だが、僕は軽く溜め息をついた。
　まただ。またホットミルクティーは一口も飲まれることなく、カップの中に入っているのだった。ミルクも砂糖もきちんと使われているというのに、カップに手をつけた痕跡がまるで無かった。それはまるで、今はトイレなどちょっとした用事で席を外していて、すぐに戻って来るような感覚だった。彼女はその気配を、テーブルの上にそのまま置き忘れて帰ってしまったような感じである。しかし、カップに手を触れてみると、中のホットミルクティーは既にもう冷たくなっており、その感覚もまた冷たくなってしぼんでいった。
　僕はトレイに手をかけ、静かに持ち上げた。紅茶の甘い残り香が、

一瞬だけ漂って、すぐに消えた。
――吉見も気になるよなぁ。
先程の寺崎先輩の言葉が頭の中をよぎった。僕は何をしているのだろう？　彼女のことが気になる？　そんなこと、あり得るはずがない。
僕はトレイを持ったまま、呆然と立ち尽くしていた。熱々だったホットミルクティーは、更に冷たくなり、白いミルクの濁りもまた増しているような気さえした。カップの中の液体に反射して映る僕の目は、ゆらゆらと揺れながら、何か汚れて見えた。

彼女の名前は、北瀬りおと言うらしい。
そのことを知ったのは、その日からちょうど1週間後のことだ。ただ、どのような漢字を書くのかはわからない。北瀬、という漢字も僕の勝手な想像である。
土曜日の午前中。大学は休みの日だった。月曜日までの流体力学のレポートを終わらせるために、僕は大学の付属の図書館にやって来ていた。春休みが明けたばかりの図書館は、学生の数はまばらで、館内はやけに静まり返っていた。
窓から差し込む春の日差しが、暗い図書館の中を明るく照らしている。逆に眩しすぎるくらいである。太陽の光が直接当たらない、それでいて、暗くない場所を選んで座った。椅子と床とが擦れる音がやけに大きく響いた。椅子も結構古くなっているのか、ぎしぎしと耳障りな音がした。
それでも、図書館の中は人が少なく、静かだったため、レポート用紙を広げてゆっくりと集中して課題を進めることが出来た。しかし、その集中力の糸は、数十分が経たない内に切れてしまうこととなった。　突然、静かなこの空間が騒がしくなった。高校時代からの友人であり、大学も同じ場所に進学した小野英也がここへやって来たからだ。学科こそ違うが、小野とは、ちょくちょくキャンパス

内で顔を合わす。行動範囲が広いのだろうか。正直言うと、苦手な人種である。
「よぉ、吉見。こんな所で会うなんて奇遇だな」小野は開口一番、自分が一番騒がしいのもお構いなしに高いトーンで言った。「あ、そうだ。お前に朗報があったんだ」
小野はにやにやした顔つきで、僕の座っている向い側の席に、どかりと大きな態度で腰を下ろした。ここが図書館であるということを、まるで気にも留めていない様子である。
「何だよ」小野の朗報はいつも下らない内容であったので、僕はレポート用紙に顔を落とし、ペンを走らせたまま低い調子で言った。
「僕は今、忙しいんだ」
「相変わらず冷たいなぁ、お前。その性格直した方がいいぜ」
「余計なお世話だ。お前こそ、そういう今みたいに、人の領域にずかずか踏み込んでくる性格をまず直した方がいいぞ」
「へっ」小野は鼻で笑う。「それが俺のいいところなんだよ」
どこが。そう思ってはいたが、いちいち反応するのは面倒なので、口には出さなかった。代わりにうんざりした顔をしながら、もう行けよと言わんばかりに、僕はレポート用紙をめくり上げた。
「ホットミルクティー」
思わずレポートをめくる手が止まってしまった。顔を上げると、小野の人を小馬鹿にしたような目と僕の目が合った。
彼はすぐに目を逸らし、何処を見るというわけでもなく、視線を泳がせている。口元が、にっと、ずる賢そうに曲がっていた。
「情報処理学科2年、北瀬りお」その口から、まるで含んでいた水がだらしなくこぼれ落ちるように、言葉が漏れた。「ちょうど、俺たちのいっこ下だな。家庭教師のアルバイトをしていて、出身高校は――」
「ちょ、ちょっと待てよ」小野の口からとめどなくこぼれてくる言葉を、僕は遮った。「なんでお前がそのこと知ってんだ」
小野は言葉を切り、あぁ、と頷いてから、「俺の友達がさ、その

北瀬っていう女と知り合いでさ、それで――」
「違うって。ホットミルクティーのことだよ。なんで、僕のアルバイト先のことまで知ってるんだよ。お前、1回も来たことないだろ」
「そっちかよ」小野は大げさに肩をすくめた。「さぁな。それは吉見のご想像にお任せするわ」
そう言うと、小野は満面の笑みを浮かべた。意味深なことを言って、僕をからかっているのだろうか。
「その娘、お前に気があるみたいだぞ」
「……はぁ？」
小野の放った言葉の意味が理解出来ず、僕は思わずうわずった声を上げてしまった。図書館内にいる数少ない学生たちの不審げな視線を感じ、背中がやけに冷たくなったような気がした。変な汗が流れ、椅子の軋む音が響く。
小野はそんな僕の反応を楽しむように、肘を机の上に置き、その掌の上に顎を乗せた。例の如く、目と口は緩んだままだった。
「だから。北瀬りおが、お前のことを好きらしいぜ。その娘の友達――俺の友達でもあるんだけどさ、そいつから聞いた話だから確かな情報だな、こいつは。ま、要するにコレはアレだ。ひとえに俺の人脈ってヤツが功を奏したワケであって、そこは俺に感謝してだな、今度一回――」
「会えって言うのか？」
僕は再び言葉の途中で、小野を遮った。
「冗談じゃないよ。名前が北瀬りおとか、僕に気があるとか、はっきり言ってどうでもいいよ。関係ないし。大体、何でお前からそういうことを聞かされなきゃいけないわけ？　単にお前がいつものように合コンとかして、出会いを求めたいだけだろ？　言っとくけど、俺は会うつもりはないからな。さっきも言ったけど、変なお節介で、人の領域にまでずかずかと入り込んで来るなよ。その娘の気持ちとか考えてないくせに」
僕は持っていたペンを乱暴に机の上に置いた。それは机の上で一

度跳ね返った後、ころころと転がり、すぐ側の消しゴムにうまくぶつかって止まった。
小野は手の上に顎を載せたまま、ふう、と鼻で小さく溜め息をついた。
「……その娘の気持ち、ねぇ。お前もホントに考えてんのかな、それって」
溜め息と共に吐き出すように呟いた小野の言葉が、僕の耳に針のようにするりと入り込み、胸まで刺さる。
「……どういう意味だよ」
僕の質問には答えないまま、小野は、さてね、と言葉を洩らし、窓の方を向いて立ち上がった。僕は彼のその行動を目で追いながら、吐き出せずに喉の奥に引っ掛かって取れないような苛立ちが、少しずつ大きくなっていくのを感じた。動揺と焦りが入り混じって、その苛立ちがますます膨れ上がっていく。自分でもよくわからない気持ちが生まれてきていた。頭のてっぺんが、髪の毛を引っ張られるようにチリチリと痛む。
「ま、そう言わずに会ってみろって。悪いようにはしねぇし、ちゃんと紹介してやるからよ。人間、誰にでも幸せになる権利はあるんだから」
ははは、と渇いた笑いをあげながら、小野はポケットに手を突っ込んでその場から離れて行った。
幸せになる権利？　その権利が誰にでもあるということは、果たして誰が決めたのだろうか。
僕はペンの横にある消しゴムを素早く左手に取り、強く握りしめた。自分の幸せを握り潰すように、強く、強く握りしめた。やがて力を使い果たし、握る手を緩めた。同時に、長い溜め息がこぼれ落ちる。
こうしている内に、自分の持つ幸せが、全て逃げていけば良いのにと思う。幸せを持つことが普通であるならば、幸せになろうとする権利すら持たない者は、一体どうすれば良いのだろうか。

僕は消しゴムを力なくぽとりと床に落とし、肘を机に載せ、頭を抱え込んだ。
ペンが転がり、消しゴムに当たって止まるように、気付いていない間に僕の生き方もあの頃からぴたりと止まってしまっているみたいだ。もしかしたら、止まっているのではなく、少しずつ後退しているのかもしれない。後ろを振り返った場所には、いつも隣にもう1つ僕の足跡が並んでいるのだった。
僕の頭の中の思考は、静寂の図書館と溶け合って濁流のように乱れていき、やがて真っ黒な泥水となって流れていった。後には、至るところに汚れがついた部屋の中を、空っぽになった思いがぐるぐると回っているだけだった。

父が亡くなったのは、今からちょうど1年前の桜が散る頃、僕が大学2年生になってすぐのことだった。
急性心筋梗塞――つまり心臓発作だった。
医者の話によると、発作が始まってから病院に運び込まれるまで、既に30分以上経過していたらしく、もう手遅れの状態だったそうだ。
僕は医学に関する知識など全く持っていなかったので、完璧主義で几帳面な性格の人間がなりやすいと知った時は、正直、腹が立って仕方がなかった。そんな統計上の情報なんて信じることが出来るわけがなく、それは砂で書かれている文字のように頼りないものと思っていたからだ。それなのに、几帳面な性格の父が本当に死んでしまった。脆く、崩れやすい情報が、まるで風が桜の花びらをさらうように、父をいとも簡単に奪い去っていってしまったのだ。言い換えると、そんな情報が当てはまってしまう程に、人間というものは、脆くて弱い生き物なのかもしれない。
崩れやすいものが無くなってしまうということは、実感が沸かないことだった。僕は、父がいなくなっても、すぐにそれを受け入れ

ることが出来なかった。受け入れたくなかったのだ。
父の葬儀には、大勢の人たちが参列していたことを、おぼろ気ながらに憶えている。でも、わずか1年しか経っていないと言うのに、誰が来ていて、誰が誰なのか、何処の人なのか、一切憶えていなかった。ただ、父はやはり偉大で、立派な人間だっただろうということは、しっかりと理解していた。いや、もしかしたら、その時初めて自分の中で自覚したのかもしれなかった。
日本有数の航空会社に勤め、整備士として活躍していた父の背中を、子供の頃から追い続けていた。眩しすぎて漠然としか見えていなかった後ろ姿に、僕は必死に追いつこうとしていたのだ。気が付けば、父と同じ道を求め、父と並ぶために歩き始めていたのだった。
それは、今考えてみると、尊敬という2文字の言葉で表せたのかもしれない。知らず知らずの内にそれが道標となり、僕を導いてくれていたのだった。道標を僕の進む道に立てていてくれたのは、他でもない、父なのだった。そのことを、失ってしまってから初めて気付かされた。
だが、その道標はもう見つけることは出来ないのだった。二度と。
不思議と悲しみは無かった。感情なんて、皆無だった。泣くことも、落ち込むことも、暗くなることもなく、葬儀の間、ただ淡々と立ち尽くしているだけの人形だった。きっと、他人にもそう見えていただろう。そもそも、悲しみとは、一体何なのだろうか。
当時、高校1年生だった妹の彩音は、案の定、う、うううと嗚咽を洩らしていた。とめどなく溢れる涙は、まるで僕の流すはずだった涙まで吸い込んで流れているみたいだった。感情を素直に表に出し、ありのままの自分をさらすことが出来る妹の彩音は、僕にとっては羨ましい存在だった。
妹とは反対に、気丈な母は、きりりと唇を真一文字に結んで、黒い喪服に身を染めた人たちとの対応を、厳かに堂々と行なっていた。それでも、目尻には薄い赤に染まった涙の跡が細々と残っていた。保育士として日々奮闘している母は、人前では決して泣くまいと、

気持ちを精一杯コントロールしていたのだろう。辛くても、悲しくても、ただじっと堪えなくてはならない扉が存在している。その扉は、常に自分の意思によって開かれなくてはならないのだ。感情のままに自分を出してゆくということは、母にとっては、きっと許しがたいことなのだったのだろう。

僕だけだった。僕だけが、感情を持っていなかった。コントロールしていなかった。僕は、その大勢の人の中から切り離され、暗闇の枠の中から脱出出来ずに身を任せるだけのただの道化だった。何も考えず、ただただ重苦しい油絵のような空間に突っ立っているだけだった。

葬儀が終わった後、僕らは家へと戻った。そこは、父のいない、抜け殻のような家だった。空っぽになった僕と同じく、それはただ、そこにあるだけの存在だった。全てをただ受け入れるだけだった。

「お腹空いたんじゃない？　久史、何も食べてなかったでしょ」

家に戻ってすぐ、母が台所に立ちながら、それとなく僕に尋ねてきた。葬儀中に食事は出たものの、食べる気がしなくて一口もつけずにいたのだった。

あぁ、うん、と曖昧な返事をして、僕は喪服の姿のまま、居間のソファにだらしなく寝転んだ。顔を埋めると同時に、少し埃っぽい空気が鼻に流れ込んできて、むず痒くなった。

それでも、と思った。それでも、何の感情も湧いてこなかったのをよく憶えている。身体はきちんと刺激を受けて反応しているのに、僕の気持ちの崩れは全くなかったのだ。父を失くしたのに。道標を失ったのに。

母の作った即席の夜食がテーブルに置かれると、僕は身体をだるそうに起こした。

彩音は？　食べる？　という母の言葉が僕の耳を通り抜け、どこか遠くに向かっていった。

彩音はいつの間にか着替えていて、上下ジャージという簡素な格好をしていた。膝を抱え、その上に顎を載せて、僕の丁度反対側の

テーブル脇に座っていた。長く伸びた髪の毛が、小さなおでこに張り付き、赤く腫れ上がった瞼を隠していた。
母が小さく溜息をつくのが聴こえた。そして再び台所へと戻って行った。恐らく、彩音の分も持ってくるのだろうと予想出来た。彩音も、葬儀の時に何も口にしていなかったのだ。
目の前のテーブルには、やわらかな香りを漂わせている出来たてのチャーハンがあった。こういうのを生きた食事というのだろうか。葬儀に出た食事は、文字どおり死んでいた。
母が持ってきた彩音の分のチャーハンがテーブルに置かれると、僕は自分の分を手に取り、一口食べた。空っぽになったような気がする自分でも、きちんと味覚は生きていることを再確認して、少しだけほっとした。すぐに僕は皿を空っぽにして、テーブルの上に置いた。空腹感は元から無かったが、満腹感だけはあった。空虚感は消えてはくれなかったのに。
彩音は、テーブルの上に置かれたチャーハンに目をくれることなく、ただ黙って俯いていた。
「……喰わないのか？」
僕はぽつりと呟くように言った。だが、彩音の反応は無かった。それでも僕は続けた。
「早く喰わないと、冷めちゃうぞ」
まるで独り言を言っているみたいだな、と心の中で呟いた。感情の乾いた世界の、一人ぼっちの住人みたいだった。
気がつくと母はそこにいなかった。ふぅ、と肩で溜息をつきながら、僕はのろのろと気だるそうに立ち上がった。
「着替えてくる。彩音は、着替えるの早かったな」
僕が喪服の黒ネクタイを片手で緩めながら、居間のドアノブに手をかけ、扉を開くのとほぼ同時だった。
「……するから」
「え？」
部屋を出ようとした僕の背中を、彩音の声の断片がかすった。僕

は肩越しに振り向いた。彩音は、俯いたままだった。
「なんだって？」
僕は静かに尋ねた。
「喪服。お父さんがいない匂いがするから」
今度は彩音の言葉の全てを受け取ることが出来た。僕はその彩音の言葉を大きく吸い込むように深呼吸をしたが、息を吐き出すのをしばし忘れてしまった。言葉の意味を頭の中で一つ一つ分解しながら、でも、僕は何も言い返すことが出来ないまま、妹を残して黙って居間を出た。
真っ暗な自分の部屋に戻り、電気をつけないまま着替えていると、心の奥が何かを拒絶するかのように黒い膜を張り始めていて、自分の中の何かが閉じ込められていく感じがした。
――お父さんのいない匂い。
彩音の言葉が再び頭の中に反芻していた。
どうしてあの時、妹に何も言わなかったのだろう。家族として、一人の兄として、一人になってしまった男として、何か言うべき言葉が、あったはずなのに。
僕は壁に寄りかかり、腕をだらりと垂らしたまま、頭の後ろを壁に思い切りぶつけた。一瞬、頭の奥が瞼の裏まで飛び出てきたような気がした。
今までのことを全て捨て去って、これからすべきことだけを新たに選び出して拾い集めるなんて、一体どのようにすればいいのだろう。この状態が、既に架空の状態だったというのに。
真っ暗な部屋の中で、ベッドの上の携帯電話だけが、ちかちか、ちかちかと、ひっきりなしに光を放っていた。
当時付き合っていた彼女に別れを告げられたのは、それからすぐのことだった。
今週末は珍しくアルバイトが休みだった。アルバイトをしながら

生活をしている苦学生にとっては、願ってもない幸運の休日なのだが、僕にとっては暇を持て余す退屈な時間だ。だが、その退屈というものは、普通の人にとっては最大の苦痛であろうが、僕にとっては心地よい味わいになりつつあった。

考えても考えても、出口に辿り着けない永遠に続く穴にはまってしまったかのような思考を限りなく与えてくれる。それは決して出口には辿り着いてはいけないのだ。

終わりがあれば、始まりがある。誰かが言ってた言葉だ。

――始まりなんて、無い方がマシだ。いつだって、残るものは後悔と挫折の堂々巡りだ。

朝起きるのが早い僕は、午前中の内に掃除や洗濯、買い物など全て済ませていた。昼ご飯を食べたら、午後からはたまっていた本でも読もうかと思っていた。しかし、昼ごはんの焼きそばを作っている最中に、突然携帯電話が荒々しく声を上げたのだった。

うんざりという気持ちそのものを吐き出すように、僕は息をついた。携帯電話を取り、着信に答える。相手は小野だった。再び、軽くうんざりを吐き出す。

「今日の夜、暇か？　実は、三・三の合コンを開くんだけどさぁ、男のメンツが一人足りないんだわ」

思わず電話を切りたくなった。これからの予定が既に決まっているのに、それを無理やり変えられるのは酷く腹が立つ。

「あ、めっちゃ可愛い娘は揃えてあるらしいから、そこんところは心配すんな。でも、そんな時に限ってこっちの男メンバーが集まらないでやんの。ついてないよなあ。ミッチーとかヤスとか？　今日はバイトがあるらしくてよ。そこで！　吉見に連絡してみたってワケ。俺って気が利くだろ？」

たった今切っていた玉ねぎの臭いが、携帯電話を握り締める指先から漂ってきた。小野の誘いとの相乗効果に顔をしかめる。

「……嫌だ」

不意に出た言葉がそれだった。普段ならそんな連絡などしても来

ないくせに、可愛い娘が来るとなると、是が非でも行こうとするのか。要するに僕はただの人数合わせだ。そんな苛々とした熱い想いが、舌の上をするりと転がり落ちてきたのだ。

「はぁ？」

しかし、こちらの一言を一瞬で遮り、不協和音にも似た小野の抗議の声が耳にまとわりつくように響いた。突然の断りに、さすがに向こうも苛立ちを隠せなかったようだ。

「お前さぁ。どうせ暇なんだろ？　バイトもないんだろ？　家で独りでいて、どうすんのよ。まじ、それ、ひくわぁ。大体、お前この前も『嫌だ』とか言い張って、サークルの飲み会も来なかったじゃねぇか。次は行くとか言ったくせに、結局口だけかよ。だから、お前のそういうところがムカツクって前から言ってんだろ」

くぐもった声から、他人にとっては正当であり、僕にとっては偽りの意見が紡ぎ出されてくる。それらは混ざり合っては、ぶつかり合い、携帯電話の変換されたデジタルの声となり、僕の頭の中に響く。

どうせ、か。僕が一番嫌いな言葉だった。はっきり言って、どうでもいいことをどうにかする気なんて、毛頭ないのだ。

「大体この前の――」

長い。一体いつまでこのどうでもいい時間は続くのだろうか。

結局、小野のうんざりするような不協和音を全て聴いてから、僕は今日の夜、合コンに行くことを承諾してしまった。

携帯電話を切ると、まな板の上の野菜たちは待ちくたびれたぞと言わんばかりに、少しだけ水気の無くした様子で散らばっていた。僕はそれらを一つの器にまとめ、フライパンを熱し始めた。玉ねぎの臭いは、まだ取れていなかった。

午後7時に居酒屋『なごみ』の前で落ち合うことになっていたので、僕は律義にちょうどその時間に着くように家に出た。

外は霧が出ていた。今の時期はそんなに珍しくはなかったが、しっとりとした重い空気をかき分けるように歩いていると、そのせいか、木々がざわざわとせわしなく揺れていた。風は冷たく、耳の中が金属をくっつけられたようにひんやりとした。

「おぉ、吉見。こっちこっち」

居酒屋の前まで来ると、僕の姿を確認した小野が声をかけてきた。黙って近付いて行くと、隣には見知らぬ男が立っていた。

すらりとした長身に、小奇麗な今風のヘアスタイル、整った顔つきとそれに似合った色の細い眼鏡。いかにも女の子ウケしそうな青年である。

「同じ学科の溝口ハルオ」

と、にやりとしながら小野が言った。

「どうも」

溝口と呼ばれた男は、軽々しく片手を挙げ、こちらも小野と同じような笑みを浮かべながら挨拶をしてきた。口元を動かすと、顎下の無精ひげが目立ったが、逆にそれが小奇麗さとうまく対比していて、見苦しさを感じなかった。

いかにも遊んでそうだな、と心の中で彼の第一印象を決めつけて、僕は無言で会釈だけした。小野と同じように、苦手なタイプだ。

「……で、今日のメンツは？」

「おう。建築デザインの可愛いどころを集めたぜ。その学科に声をかけれるちょっとしたあてがあってよ。今回はマジで期待しても大丈夫だぜ」

「まじで。そりゃあ期待できるぜ」

小野と溝口は舌なめずりをするかのように、だらしない言葉を吐きながら店の中へと入って行く。僕はそれに取り残されながらも、彼らがこぼした下品な言葉のしっぽにつかまるようにしてついて行く。

予約してあった席は店の一番奥だった。女性メンバーはまだ来ていなかった。三対三の掘りごたつ式の席の、入口から奥側の席に僕

を含む男性メンバーは座った。溝口、小野、僕の順だった。
週末というだけあって店内はざわついていたが、予約したこの場所はその喧騒からは程々に距離があり、煩わしさとは切り離された空間だった。
一人で飲むにはちょうどいい感じの場所だな、とふと頭の中で考えた。切り離された空間があって、それに寄り添うようにしながらただ黙っていると、自分の考えがふわふわと浮かぶような感覚になる。その感覚がなんとなく心地良さそうな気がした。
「お、来た来た！」
脳に張り付いた思考を無理やり取り払うかのように、周りが急に騒がしくなった。女性メンバーがやって来たのだ。
「今晩はー」
「寒かったー。今日、凄い霧だねぇ」
ちゃらちゃらとチェーンを擦り合わせて鳴らすように、女性2人の声が耳の中をかき回した。押しのけられた空気とともに、彼女らがつけている香水独特の鼻をつく香りが広がった。外の重たい空気によって冷やされた身体にまとわりつき、なかなか離れてくれなさそうな香りだった。
やって来た女性たちは、1人は茶髪のゆるふわヘアスタイルに、白いブラウスジャケットを羽織った女性、もう1人は薄い茶髪のセミロングスタイルに、淡い桃色のパーカーを羽織った女性だった。2人とも大学では見たことのない女性だったが、どちらも小奇麗なさっぱりとした化粧で、好印象を持たれるタイプであろう。落ち着いた雰囲気の女性たちではあったが、僕にとっては、それが逆に狙っているような気がして好感が持てなかった。
――そしてもう1人。
2人の影に隠れるようにしてやってきた女性を目にした瞬間、僕は思わず席から立ち上がってしまう程に驚いてしまった。
「りっちゃん、ここに座りなよ」
「う、うん」

はにかみながら僕の前に座った女性は、あの、ホットミルクティーの娘だった。
「どうしたの、君。突然立ち上がって。りっちゃんと知り合いなの？」
ゆるふわヘアの女性が首を傾げながら僕に尋ねてきた。バケツで水を頭からかぶったような感覚に陥り、僕は瞬間的にのけ反ってしまった。髪がふわりとしたと同時に、再び香水の匂いが漂った。髪の毛に香水をつけているのだろうか。その香りが、まだお酒を飲んでいないにも関わらず、僕の頭をくらくらさせた。
「あ、あの、私……」
ホットミルクティーの娘が遠慮がちに口を開きかけたその時、
「あ、それじゃあ注文を取りましょうか。まずは、ビール飲む人」
と、小野が気にも止める様子もなく、メニューを広げながら声を上げ、彼女の言葉を遮った。それに呼応し、女性2人は反射的に「私も、私も」と声を張り上げた。
「りっちゃんは？　ビールは飲まないよね。何飲むの？」
目の前に座った彼女は、ちらりとこちらを上目づかいに見上げ、それからゆるふわヘアの女性が広げたメニューに目を落とした。この場でホットミルクティーはまさか頼まないだろうとは思いつつも、僕は怪訝そうな顔をしていたのだろう、パーカーの女性が怪訝そうな顔をこちらへ向ける。
「……座れば？」
言われて初めて、僕は目の前の彼女のことを凝視していたことに、今更ながらに気がついた。
「おい吉見。なに、目の前の娘に見とれてるんだよ」
はっとして小野の方を見ると、彼は真面目な顔をしつつも、目が安い福笑いのようにへの字に吊り上がっていた。その表情を見て確信した。僕ははめられたのだ。瞬間的にその場から姿を消したくなったが、僕は腰を下ろし、小野から乱暴にメニューを奪った。そして、目の前の彼女の視線から逃れるためにそれを広げる。

色とりどりのカクテルやサワーたちが目の前に展開したが、その向こうから彼女の視線がちらちらとメニューに突き刺さっているのかと思うと、なんだか落ち着かない気分になった。注文するものは既に決まっているはずなのに、まるで何かを選ぶように視線を泳がせる。目の前に展開するカクテルやサワー、はたまたワインは、色は認識しているが、一体それがどのような名前なのかはまるっきり頭に入ってこなかった。

――なんなんだ、この気分は。

ようやく僕がビールと言うと、溝口が6人分のビールを店の人に注文した。「あれ？　りっちゃん、ビール苦手なんじゃなかった？」という誰かの言葉が耳に運ばれてきたが、すぐに枝豆やら鶏の唐揚げやらを注文する溝口の野太い声にかき消され、僕はその意味が理解できなかった。

その意味を考える間もなく、すぐに6人分の中ジョッキのビールが運ばれてきて、それらはみんなの手の中へと行き渡っていった。

「それでは、乾杯といきますか」

いつの間にか自分が代表であるかのように立ち上がっていた溝口が、ビールジョッキを片手に皆に声をかける。

「何に乾杯？」

パーカーの女性がにこりとしながら茶化す。彼女の手首には、小洒落た革のアクセサリーが付いていて、なんだかすごく重たそうに見える。そう見えるのは、今の僕の気分のせいなのだろうか。他の皆は、この中ジョッキに入っているビールの中の白い泡のように、ふわふわと浮いた気分なのだろうか。泡のはじける音も澄んでいるのだろうか。僕には耳元でうろちょろする虫の羽音のように聴こえた。

「かんぱーい」

溝口が乾杯の音頭の前に何かを喋っていたのだろうが、気が付くと皆が互いのジョッキを重ね合わせていた。我に返って、僕もそれに倣った。耳慣れない不協和音が響く。

全てがまるで、ビデオのコマ送りのように途切れ途切れだった。僕は一体誰にそんなに急かされているのだろう。いや、もしかしたら自分自身で早送りのボタンを押しているのかも知れなかった。何かを、誰かから逃れるように。

僕は1杯目のビールをいつの間にか飲み干していたので、空になった中ジョッキをテーブルの上に置いた。

「えっ、もう飲んじゃったの、キミ！」

パーカーの女性はビールを一口だけ含み、そのジョッキをテーブルの上に置きながら、目を丸くした。

「あ、大丈夫」すかさず隣の小野が笑う。「コイツ、全然お酒に強いんだよ。前にサークルのコンパで日本酒飲み比べっていうのをやったんだけどさ、吉見の余裕の独り勝ち。先輩方も驚いちゃって、もうコイツとは飲み比べなんて二度としねぇ、って呆れられちゃってさ。飲み会に全く誘われなくなっちゃったぐらいなんだよね。んで、俺たちの中でついたあだ名が、『酒狩り』。いろんな意味でね」

「ぷっ。なにそれー」

ゆるふわヘアの女性が、口元を押さえながら吹き出す。

余計なことを。三人目のあの娘が反応する前に小野を睨もうとしたが、僕の言葉は再び、端にいた溝口の思いついたような声に遮られた。

「そんな話より、先ずは自己紹介だろ？　まだ皆の名前すら知らねーじゃん」

「あぁ、そっか」と、やけに納得した様子で小野がうなずく。

溝口は仕切るのが好きなのだろうか、それともただの目立ちたがり屋なのだろうか。どちらにしても、僕にとって、溝口が喋り始めようとするその姿は、駅前で餌を求めて近付いてくる鳩のようで、なんだか滑稽な気がした。

「えっと、とりあえず俺から。溝口ハルオです」ぺこりと顎を突き出して大げさに頭を下げる溝口。その格好はますます鳩のようだった。

「俺は小野英也ね」そう言いながら、ビールを三口ほど飲む。
「あ、あたしは鈴元杏子です」とパーカーの女性がにこりと笑う。
「杏子って呼んでね」
「わたしは、木村こずえだよ。よろしくね」とゆるふわヘアの女性がまた首を傾げた。
４人がそれぞれ簡潔な自己紹介を終えると、次はあなただよと言わんばかりに、僕の方に５つの視線が集中した。その視線をすり抜けるようにして、僕は先の４人よりも更に最低限の簡潔な自己紹介をした。
その間に頼んでいた枝豆や鶏の唐揚げがタイミング良く運ばれてきたので、他の人よりはるかにやる気のない自己紹介に関しては、特に何も言われなかった。
「酒狩りの吉見くんね」
木村こずえが鶏の唐揚げを頬張りながら、確認するように言った。小野のその言葉だけが強烈だったようだ。
そうそう、と小野が再び自信ありげな笑みを溢した。「これ、広めといてね」
「そうする」とにやりとする木村こずえ。
そんなやり取りに加わる風もなく、ただ黙って会話を聞いていた目の前のあの娘に、例によって溝口が声を掛けた。
「最後は君ね」
彼女は、いつも僕が働いている店に来て注文をする時のように、火照った頬をますます赤らめていた。
「北瀬りおです」と、小さいけれど、それでいてよく通る声で彼女は自己紹介を始めた。「えっと、情報処理学科の２年生です。鈴元さんと同じ高校で、バレー部の主将をやってました」
「えっ？　りおちゃん、まだ２年生なんだ。ってことはまだ２０歳前？」
もうちゃんづけかよ、とさっきから話の腰を折ってばかりいる溝口に心の中で舌打ちをした。

「あ、いえ。ついこの前、誕生日が来たばかりです。４月２日生まれなんです」
「あ、そうなの？　すげーな、じゃああと１日ずれてたら学年が違って、まだお酒が飲めなかったんじゃん」
　違うだろ。溝口は実は頭が悪いのか、それとも狙ってやっているのだろうか。そんな溝口のよく理解できない言葉に乗っかることもなく、鈴元杏子が北瀬りおについての話を始めた。
「この前あたしと一緒に、りっちゃんの誕生日パーティをやったんだけどね。りっちゃんたら、２０歳になったからって言って、もうお酒が飲めるってはしゃいでたんだよね。で、とりあえずビールを飲んでみたんだけど、そしたら、こんなの飲んだこともない、苦い！　って言って。その時の苦そうな顔が超面白くて、可愛くて、最高だったー。ねぇ、りっちゃん？　だからもうビールは飲みたくないって言ってなかった？」
「う、うん。でも今日はせっかくいっぱい人がいるから、ちょっと頑張ってみようかな、って思って」
「へぇ、なかなか気が利く娘だわ。吉見も見習ってほしいくらいだぜ。……あ、店員さん、生２つ」
　店員さんが持ってきた豚串をみんなに取り分けながら、小野が突然肘で僕のお腹を小突いてきたので、食べようとしていた枝豆が宙を舞った。
「酒狩りの吉見くんは、初めてビール飲んだ時はどんな感じだったの？」
　木村こずえが尋ねてきた。僕の呼び名はもうそれで定着したらしい。北瀬りおはビールの入った中ジョッキを戸惑いがちに持ちながら、ちらりとか細い光を漏らすような視線を僕に送ってきた。
「いや、別になんとも……」
　何も言わなくても、僕の中の事実を見透かしているような、か細い光で僕の心の奥を照らしているようなその視線が、ちくちく痛かった。

ビールを初めて飲んだ時のこと。それはよく覚えている。去年の春だ。初めて飲んだ時のことは覚えていても、味はどうだったかはまるで記憶にない。でも、それを思い出すこと、その時の記憶を更新すること、どちらも嫌だった。時を止めたままって言ったら聞えはいいけど、僕は結局、新しい記憶を作るのが怖いんだ。それを目の前の彼女に見透かされているようで、僕は再び手元に置かれたビールを、また一気に飲み干した。今頭の中で考えていることと一緒に、光が届かない胸の奥へと。

あとは何を考えていたのか、何を話したのか、まるで覚えていなかった。ただ、飲み会の終わり、北瀬りおとの別れ際に言った言葉だけは、頭に鮮明に残っていた。

「あのさ、もう店には来ないでくれる？　飲みもしないホットミルクティーしか頼まないでさ。迷惑なんだよ、こっちは」

その時、彼女がどんな顔をしていたのかは、知らない。知りたくもなかったし、見ようともしていなかった。

帰り道、冷たい風と共に鋭い雨の矢が頬に当たってきた。その中を僕は、濡れるのも構わずに全力で走り出す。走って、走って、自分の家も通り過ぎるくらいにどこまでも走った。やがて、お酒のせいか、疲れのせいか、走っているのかどうかもわからないくらいに体が言うことを聞かなくなり、それと同時に頭の中が真っ白く染まっていった。その時にようやく、僕は気付いた。

あれは、強がりでも、本音でもない。単なる言い訳だった。

お昼前だというのに、大学のレストランはやや混み合っていた。学生たちの話し声に混じった食器の擦れる音がやけに響き、途切れることのない喧騒感を生み出していた。

「今から会わない？　まだお昼食べてないよね。私、おごるわよ」

という突然の電話で今日は始まった。

特に断る理由も思いつかなかった。二日酔いとも風邪ともわから

ぬその倦怠感を引きずりながら、僕は起きてすぐシャワーを浴び、すぐにこの場所へやってきたのだ。
電話の相手はまだ来ていなかった。僕は窓際の席に座り、窓の外を眺めながら、ぼぉっと時間を過ごしていた。
昨日の雨と風が嘘のように、今日の空は晴れ渡っていた。アスファルトの道路はもう既に乾いていて、脇の草木は点々ときらめく水玉を滴らせながら、まだ小さな体で太陽の光を全身で浴びるために背伸びをしているようだった。大学の敷地内の桜並木は既に散りかけていた。昨日の雨と風によって散らばった桜の花びらが、道端の泥にまみれて山のようになっていた。
その光景を見ると、不意に、くすんだ色をした昨日の飲み会の光景が頭の中で重なった。頭にずきずきと鈍い痛みが走った。その光景を振り払うように目を閉じると、夢のようなその断片が鈍い痛みにすりつぶされ、やがて痛みとともに消えていった。
「お待たせ」
同時に声がかかった。外の風景に気を取られていたので、近付いてくる人影に気付かなかったのだ。
背中まで届いた伸びやかな艶のある黒髪をかき分けながら、今西順子は僕の座っている席の向かい側に腰を下ろした。その悠然とした態度は、頼もしそうでいてどこか寂しげな気がしたのは、僕がそう思ったからなのか。
忘れもしない顔。1年前に別れた彼女だった。
「久しぶりね」
「うん」
それだけ言って、僕は言葉を切った。1年振りだと言うのに、大した懐かしくもなく、話したいことも特になかったのだ。その理由も特になかった。
やがてウェイターが2人分の水を運んできて、注文を取った。
僕はキノコとチーズのドリア、順子は野菜たっぷりナポリタンと食後にホットティーを注文した。

僕は水を一口だけ飲んで、何気なく窓の外に目を向けた。ちょうど、雨風に耐えたはずの桜の花びらの1つが仲間の後を追うようにして、オレンジ色と黄色の混じり合った光の帯の中、最期の憂いを奏でていた。さまようように地面に辿り着いて、くすんだ色の泥にまみれるその様は、一体、何を語っているのだろうか。この、青空の下で。

ウェイターが食べ物を運んで来るまでの間、僕は会話をすることもなく、ただただ外を見ているだけだった。順子も口を開くことなく、外の景色をただ眺めていた。

やがて、2人分の食べ物が運ばれて来ると、僕らはどちらともなく、のろのろとそれを口に運び始めた。

「まだ苦手なの？」パスタをフォークに器用に絡めながら、順子は唐突に口を開いた。そして、目線をちらりとひらひら舞い落ちる桜の花びらに向ける。

僕はキノコをフォークに刺したまま、しばし手を止めた。目の奥に、桃色の欠片が横切っていく。

「……まだ1年しか経ってない」

「そうね。そんなに割り切れるもんじゃないわよね」

それだけ呟くと、順子は再びナポリタンを黙々と食べ始めた。時折、「うん、おいしい」と、感嘆の声を洩らしながら。

ものの数分でナポリタン食べ終わり、最後の野菜を口に運ぶと、順子は紙ナプキンで丁寧に口を拭って、一息ついた。その姿を見てほんの一瞬だけ、順子とはもう別れたんだな、という感覚が胸の奥から、じわりと薄い紙に水を垂らした時のようにぽつぽつと沸き上がって来た。その感覚が集まると、まだ付き合っているのかも知れない、そんな錯覚に陥りそうにもなった。

僕がドリアを3分の2程度食べたところで、順子はウェイターを呼び、ホットティーを持ってくるように頼んだ。僕と彼女との間での、いつもと変わらない日常だった。2人で食事を取るとき、僕はいつも食べるのが遅かったのだ。

やがて、ウェイターが順子のところへ食後のホットティーを持ってきた。それはミルクが付いていて、彼女はそれを当然のようにカップの中へと注ぎこんだ。

「あ……」

僕はつい、無意識のうちに声を上げていた。

「何？」順子はかちゃかちゃとスプーンを回しながら、不思議そうな視線を僕の方へと向けてきた。「ホットミルクティーがそんなに珍しいの？」

「……いや。なんでもないよ」

「おかしな人」

くすくすと、この日初めて見せるくすぐったいような笑顔に、今まで少しだけ重さを感じた空気が、少しだけ浮かんで傾いていくのを感じた。久しぶりに感じる空気と、もう自分のものではない笑顔が混ざり合い、2人の凍った時間を少しだけ溶かしていく。

「どう？　あれから」

順子はホットミルクティーを飲みながら、カップ越しに僕の方を見つめた

「どうって……」急に言われても、辿るべき話の糸口は掴めない。もともと糸なんてないのかも知れない。人と話すべきことなんて、空っぽなのかも知れない。

「彼女とか、出来たの？」

悪戯好きな子供のような順子の目つきに、一瞬、あの娘の存在がちらりと浮かんだが、僕はすぐに首を振った。

「そんなわけないだろ」

もう既に冷めてしまったカリカリのチーズを、言い訳するように口の中へと押し込んだ。固くなったチーズの中から、まとわりつくような油分が舌の上に広がった。

「ふーん」

小悪魔のような笑みを顔に貼り付けたまま、彼女は窓の外に目をやった。その瞳には再び桜の花びらが映し出されていた。

父が死んですぐ後、桜が花びらを落とすようにあっけなく、順子とは別れた。果たしてそれは悲しかったのか、辛かったのか、それはわからないけれど、全てがどうでも良い気持ちになったのは覚えている。いや、全てがどうでも良くなっていたのだった。いつだって、悲しさや辛さというものは後付けである。何が大事で、何が不要なのかは、その瞬間にはわからないものなのだ。

ひらひらと、自分の居場所を探すように舞い散る桜の花びらが、僕は嫌いだった。自分の居場所なんて、僕は既に失くしていたんだ。

「……人間って、誰でも何かを捨てて生きてくしかないんだよな」

僕はふとそんな言葉を溜息と一緒に軽く呟いた。自分の居場所がないなら、生きてく道の中で、何かを捨てて生きてくだけなのだ。何かを探すなんて、疲れるだけで何も変わらない。見つからない時はどうすればいいかなんて、誰も教えてくれないのだ。

「あなたの言う何かって、何なの？」

順子はうんざりするような口調で言葉を吐き出す。僕の言葉は、順子のその重たい言葉に踏み潰されるように消えていった。僕は順子の言葉に対して、何も答えることが出来なかった。僕が考えることなんて、単なる現状維持だってこと。そんなことは心の隅で、自分は本当はわかっているんだ。

「どうして今日は突然会おうなんて言ってきたんだ？」

話をはぐらかすように、僕は尋ねた。

「大した理由じゃないわ。ただ会いたくなったから、会いに来ただけよ」

「嘘だ。そうやってすぐ順子は上っ面だけで物事を言う」

今度は僕が重い空気を吐き出すように言った。

「……よく存じていらっしゃる」

順子は肩をすくめて笑った。

「大した理由じゃないのよ」一瞬の沈黙の後、順子は言った。「吉見と別れた理由が、考えても考えても、ずっとわからなかったのよね。あの時は私の方から別れるって話を切り出したわけだけど、自

分でもどうしてあんな言葉を口から出したのか、まるでわからなかったのよ。でも、1年経っても、どんなに考えても、自分の気持ちが未だに全然わからない。だから、それを確かめるために吉見に会いに来た。これで答えになってる？」

順子のまっすぐな瞳に僕はどぎまぎした。十分に大した理由だった。彼女は1年前から変わろうとしているのだ。そのことが良くわかって、僕はその現実から背を向けて逃げるように、順子の視線から目をそらした。それに比べて、僕は一体、これからどうしていけばいいのだろうか。

「桜ってさ」順子が再び言葉を紡ぐ。「桜に限らず、花全体に言えることなんだけどね。人によってはこの花が好き。だけど、この花は嫌い。そういうのが人によっては全然違うじゃない。何が好きで、何が嫌いなのか。でも、それって、その花の姿を全部を見ようとしたり、あるいは全部の姿を見てから、嫌いになってると思う？」

僕の答えを待つことなく、順子は続ける。

「私が思うに、多分、違うのよね。何か、1つだけでもいい。吉見の言う何かでもいい。自分の中で、その花に対して、何か嫌な部分が1つだけでもあれば、それを理由に嫌いな部分を膨らませて、全体として嫌なものとして見てしまう。好きなところをどんどん捨て去っていく。そうやって、人は1つずつ嫌いなものを増やしていく。だから、好きな人もおんなじなんだよね。結局のところ、その何かって言うのは、きっかけだけなんだよね。単なる言い訳……」

順子はもう僕の顔から視線をそらしていた。ぼんやりと桃色に染まりゆく外の景色を見つめ、もう既に冷えているであろうミルクティーをスプーンでかき回している。

「……桜も不運よね」と溜息をつきながら呟く。「散る時は一瞬なのに、花を咲かせている時間も短いのに、その短い時間の中に、ほんの些細なきっかけが生まれるなんてさ」

かき混ぜる手を止め、既に冷えたホットミルクティーのカップを手に取ると、彼女はふと唐突に黙り込んだ。

どうしたの、という僕の言葉が舌の上で転がる前に、
「人に優しくしてる？」
と、視線をカップの中に落としたまま、順子が尋ねてきた。
その言葉の意味するところがわからなかったので、僕は転がり損ねた自分の言葉を胃袋の中に押し込んだ。彼女はゆっくりと視線を戻し、僕の方をじっと見つめながら、はっきりと言った。
「私、吉見とどうして別れたのか、そのきっかけが、ようやく今わかったような気がするの」
順子は冷えたホットミルクティーを口にすることなく、カップをテーブルの上に戻した。
「あなたの目、濁ってる。まるで、この冷えたホットミルクティーみたい」

僕は何も見えていなかった。見ていなかったのだ。いや、そもそも何も見ようともしていなかったのだ。何もかも。自分の存在すらも。
だから、何か変わっていたのか、自分を振り返ることもせず、毎日を頑なに切り捨てて投げ出しているような自分が、他人に優しく出来るはずもなかった。医者が目隠しをしながら手術をしているように、自分の悪いところや変えなくてはいけないところを、最初から探そうともせず、話そうともしていなかった。悪いところが見つからなければ、ただただ淡々と日々が過ぎていくだけであり、そうなれば何が熱くて何が冷えているのか全然わからなくなってしまう。冷えて濁ったミルクティーを飲むような感覚だった。
でも、ただそれを認めなくなかっただけなんだ。淡々と過ごしていけることが、自分の中で一番楽な道だと決めつけていただけのこと。その言い訳を1つだけ作ることで、自分の生き方を肯定し続けていただけのこと。
「――しみ。吉見！」

名前を呼ばれてハッとした。バイト先の寺崎先輩が声をかけていたのだった。
「何やってんだ吉見。ちゃんと働いてるのか？」
そう言って寺崎先輩は、笑いながら僕の背中をどんと叩いた。弾みでかぶっていた帽子がずれ、目の上の方に覆いかぶさった。それがなんだか妙に可笑しくて、僕は思わず笑みをこぼした。全然、面白くもなんともないようなことなのに、何故だか笑いが沸き上がった。
「何笑ってんだよ、気持ち悪いな。なんか良いことでもあったのか？」
「いえ、そういうわけではないんですけど……。なんか、いろいろとこれからのことを考えちゃったみたいで」
「これからのこと？　なんだ、何か悩み事でもあるのか？」
寺崎先輩がガラにもなく、真面目な顔で僕に尋ねてきた。なんだか本気で心配してくれているみたいだ。こんなことは初めてだった。いや、もしかしたら、今までもあったかも知れない。それを僕が単に切り捨てていただけのことかも知れない。
「いえ、大丈夫です。ようやく、濁りが取れたみたいで……」
濁り？　と呟いてから、寺崎先輩は眉間に皺を寄せ、首を傾げた。
「大丈夫です」
僕はもう一度、強く答えた。
店が混む時間になり、僕はたくさんの客の対応に追われた。僕はいつものように接客をこなしていく。いつものようにと言ったら、何かが違うのかも知れない。でも、僕は何かが変わっていることに気付いていた。その何かは定かではないけれど、そのわからないもどかしさが、少しだけ心地良かった。
客の波が途絶え、僕が少し一息ついたところで、カウンター越しにあの娘がいた。思わず視線が交錯する。
「……ご注文は？」
僕は、もう何百回と繰り返し声に出してきた言葉を、再び舌の上

で転がした。その味はいつもと違い、少しだけ甘いような、苦いような気がして、僕は少しだけ微笑んだ。つられた様に、目の前の彼女も少しだけ微笑む。

僕は彼女が何を注文するかはわかっている。

そして、彼女も僕の心の中をわかっていたんだ。

彼女はそれを前から見抜いていたんだ。彼女は僕と違って、他人の見ている何かを自分の目に映るものとして当てはめていたのだ。自分の目が、何が見えていないのかを、見ていないのかを、きちんと見極めていたんだ。その目で、僕の中に巣くっていた濁ったものを取り除いてくれたのだ。

いや、取り除いたのは、僕自身だ。濁りがあったのは、僕自身、よくわかっていた。わかりたくなかったという心を、彼女は見抜いただけだ。

きっと彼女がこれから注文するものは、今日も、そしてこれからも残されることはないのだろう。空っぽになったティーカップは、もう二度と僕の目を映すことはないのだろう。

でも、今の僕の目はきっと、今までになく澄んでいる。（おわり）

（後書き）

割と短いお話だったのに、意外に終わるのが延び延びになってしまいました。短いながらも、こうして物語を書き終えてみると、やはり何か1つの作品を作り上げるというのは、ものすごく大変なんだなと改めて思います。と同時に、これを仕事しているプロの作家さんたちを心から尊敬してしまいます。自分とそんな人たちとを比べること自体、酷く傲慢な気がしますが、こうしてまた物語を完成させたことがとても嬉しいです。時間を見つけてコツコツやってきた甲斐があったってものです。

僕の友人に、絵を描くことを趣味としている友人がいるのですが、その人も1つの作品（絵）を作り上げることは、非常に難しく、とても長い時間がかかると言っていました。1カ月くらいは余裕でかかるらしいです。僕も物語を1ページ書きあげるのに、大体1～2時間かかったりします。表現は自由だっていうけれど、その表現というものはとても難しいのです。

何かを表現すること――それが文字だったり、絵だったり、言葉だったり、料理だったり――は、他人に自分の持っているものを伝えること、つまりは自己主張であると思います。ただ、あくまでそれは表現するための手段であって、それが自分そのものになるとは限りません。自己主張が強すぎたら、作品だけが一人歩きしてしまって、自分の存在が薄らいでいってしまう様な気がします。そんなことを、昼食と食べている時に友人と話していました。

さて、あとがきがマニアックな方向に行く前に、この『冷えたホットミルクティー』というお話について述べることとします。

実は、このお話のプロットは4年ほど前から考えていました。このお話の主人公である吉見君は、かなり世間に対してどうでもいい

と悩んでいる大学生ですが、当時の僕も、生活のこととかこれからのこととかで悩んでいて、大体こんな感じのうじうじ大学院生でした。その時の投げやりな気持ちとか、やるせない気持ちとか、それをつらつらと形にしてみようと思って物語にしたのが、このお話です。まさかの４年越しの完成（笑）。

今こうしてつらつらと投げやりな気持ちを書いてみると、自分がいかにどうでもいいことで悩んでいたかということが、よくわかります。そう考えることが、成長したってことなのでしょうが、人間っていう生き物は不器用な生き物ですから、その成長の仕方が悩んでいる当時はわからないのです。

何も見えない現状が嫌だから、良く見える楽な理想を求めて進み始める。でもそれ自体が既に濃霧の中、手探りで生きていることに気付いていないのです。

人間誰しも不安や悩み、葛藤を抱えて生きていると思いますが、でもそれを捨てて生きていってはいけないのだと思います。例えば、もし不安がなくなったら、自分が成長する環境が存在していますか？　悩みがなかったら、より現状を良くしていこうとする思考力が身に付きますか？　葛藤がなくなったら、物事を決める的確な判断力が身に付きますか？　つまりは、これらを全て含んだのが、『成長』というキーワードなんです。

果たしてこのお話の中で、『成長』というキーワードを伝えられたかと聞かれたら、それは疑わしいですが、結局自分が『成長』するためには、自分の意識を変えていくことだと僕は思います。

ん？　なんか最近こんな文章書いた気がするな。思い出しました。会社の新入社員研修のレポートの中で書いたんだ（笑）

とにかく、意識が変われば、自然と見えてくる世界がおのずと変わってくるのです。僕は社会人になって既に半年が経ちますが、社会に出るということはやっぱり大変で、毎日が苦痛ではないと言ったら、それは嘘になります。月曜日なんて、それはもう苦痛です（笑）でも、そんな中でも、いかにして毎日の苦痛を和らげていくか

と言ったら、それは毎日を楽しくさせようという自分の気持ちを常に持ち続けることです。

吉見君も、そのことを気付いていながらも、気付いていないふりをしていましたが、それは誰しも経験したことがあるのではないのでしょうか。悩みはあるのに、その悩みを切り捨ててまた1からやり直す。そしてその繰り返しでまた悩む。悩んでいるうちに、やっぱりその悩みは捨ててはいけないものだと後になって気付くのです。遅いかもしれないけれど、気付かないふりをせずに、悩みと真っ向から対面することが一番大切なのです。

悩みと真っ向から対面するためには、人とのつながりもとても重要になってきます。何故なら、他人というものは、自分にない何かをたくさん持っています。その人の考え方、価値観、思考力、言葉遣い、行動力など、挙げるときりがありませんが、そうした自分が持っていないものを、他人を見て補っていくことも一種の成長だと思います。他人の言葉の中に、自分の欲しかった言葉や進むべき方向があるのかもしれませんしね。

簡潔に述べますと、これが今回のお話で伝えたかったことです。自分は趣味の範囲で小説を書いていますが、今回も何が書きたかったのか、おざなりになってしまった感が強いです。プロットはしたものの、半分はその場その場の言葉で物語を紡いでるので……。これが恐らく非常に良くない（苦笑）。

次回作はもう決まっています。もう、すぐにでも書き始めたいところですが、今度からは詳細なプロットを重ねてから書き始めたいと思っていますので、これからもどうぞ宜しくお願い致します。

平成２１年１０月３０日

真辺よっぴー

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4967i/

冷えたホットミルクティー

2010年10月8日15時13分発行